

100 x 160の世界 山本恭子個展
作者プロフィール

個展へ行けば作者のプロフィールが書かれた紙があるのが普通なので、書き始めてはみましたが、自慢になるようなことは何もありません。美大を出たわけでもなく、というかそもそも美術をやったのは中学までです。しいて言えば中学生のとき、ドライポイントの作品で金賞をもらったことくらいでしょうか。

RBRの五日間コースに参加したきっかけも、お盆の前後に長い休暇を取ることになり、急で旅行の計画が立たなかったからでした。でも、いろいろな人が集まってわいわい描くのはとても面白くて、充実した五日間になりました。

色の五日間コースに参加したのはその翌年だったかと思います。それからしばらくして今度は、粘土で頭部を作る五日間コースに参加しました。これもとても楽しかった。だけど、どれも続けてゆく、というところまでは行きませんでした。

しばらく間があいて、2006年の秋にマリオンのヴィジュアル・ジャーナルのクラスを取りました。週一回で全十回のコースでした。これも、会社のストレスを緩和するために、直ちに何かを始める必要があると感じていたからで、ヴィジュアル・ジャーナルのことは何も知りませんでした。

最初の日、マリオンは金ボタンの付いたブルーグリーンのセーターを着ていて、それが結び上げた髪や瞳の色に合って、もうものすごく素敵で、ちょっとびっくりしてしまいました。彼女から、百二十ページのケント紙のノートを渡されたとき、なぜだか私は、この百二十ページを自分の好きにしているのだと思いました。それが本当の始まりだったと思います。

ノートの最初のほうはもう、マリオンに習って作ったページ以外、雑誌の切り抜きや写真、文章ばかりです。すごくがんばらないと絵は描けないので、絵はほとんど描いてない、気に入ったカラーページを好きに切り抜いて、好きなように貼る。写真を撮って貼る。後は文章です。わーっと書いて、書くことがなくなるので、パウンドの詩なんかを書き写していました。あとクリムトの絵のコピーもよく貼りました。クリムトの作品は画質の良くないコピーでも、そのコピーのきれっぱしでさえも、もう完璧に見えました。私があんまりたくさんのページを作ってくるので、もう一人の生徒に、「あなたは失業中でしょうか？」とからかわれたことがありました。マリオンは私を励まし、切り抜いて貼った、その場所がいい、とか褒めてくれるわけです。ノートの中盤から、五日間コースのときの教材だったガッシュも多少使うようになりました。主として

ページの装飾のためで、例えばページの端に単色のラインを引くとか、もうおそろおそろです。

結局私は三ヶ月くらいでそのノートを終えました。最後のページにはレッスンで描いたマリオンの顔のデッサンがはってあり、その下に「すべてのみなもとであるマリオン」と書き添えてあります。マリオンは私に、アートにおいて自由であることを教えてくれたのだと思います。それはすごい解放であり、喜びであり、また力でもあるのでしよう。

さて、なんだか長い話になっていますが、明けて2007年の秋の初め、ヴィジュアル・ジャーナルのメンバーで内輪の展示会をすることになり、モースキンの折りたたみ式の手帳一冊とその他作品数点を用意することになりました。この年の夏は、新システム導入の準備で会社では混乱が続いていて、作品を作る余裕がない、でも、全く個人的な喜びのために作ったジャーナルを展示することに抵抗がある（差しさわりのあることがたくさん書かれていましたし）、という状態でだらだら日が過ぎて、もう本当に時間がないよ、という八月のある日、台風が東京に上陸するから速やかに帰宅してください、ということになって、急に一日だけ六時前に帰れました。今日しかないと思いました。

テーマだけは決めていたので、ぶっつけ本番で、モースキンにどんどん写真を貼り、文章を書き、装飾のためにガッシュで形を描いたり色を塗ったりしてゆきました。迷ったり考えたりする時間はありませんでした。でもそういうことをしているうちに、私はガッシュの色の美しさに夢中になってしまっていて、結局、展示会には、モースキンの他、小さな画用紙一面にガッシュで色を塗り、それだけだとポイントがないので、雑誌から石像の写真の切り抜いて貼り付けたものを三つ出しました。まわりから浮かないように飾ってくれたジョイに感謝です。

実は、「あなたがうちたてる何かを私は見るだろう。私が流れ着く宇宙をあなたは見るだろう。」は、このころの作品です。まだクレーパスを使う、というアイデアを思いつく前の作品、でも対にして飾りたい、という考えは初めからありました。あと、この作品のサイズは100 x 160ではないです。このころは、たまたま家にあった小さいスケッチブックの紙をそのまま使っていました。でもそれを使い切ってしまった後、前に五日間コースに出たときのF6のスケッチブックの残りがもったいなくなって、どうにか使えないものかとカッターでどんどん半分に切ったのが、100 x 160という妙なサイズの始まりです。

2008年の五月にまた、ヴィジュアル・ジャーナルの展示会があり、これに出品しました。キューブのキャンバスを使うことが決められていましたので、アクリルに挑戦しましたが、結局、ガッシュの作品をキャンバスの上に貼り付けました。

2008年の秋には、画材一式を持って波照間島へ行きました。今回の個展では、思い切ってそのときの作品を出しました。島に五泊くらいして、食事と散歩のほかは、部屋にこもって描きました。随分変わった客だと、宿の人は思ったことでしょうか。作品は直感的に描いて、題は後から付けました。

十二月のアートマーケットにも出品しました。作品2と作品12（ともに入り口正面の四つ切額）は、このために制作したものです。

今年の八月には一ヶ月間、梅が丘のギャラリー喫茶ゾーエーで初めての個展をしました。そのマスターが何かの拍子に私に、「悟りでもひらくみたいに描き始めたのだろうけど。」と言って、私はまだ悟ってはいないけれど、描く理由があるとしたら、それは結局、そういうことではないのだろうかと思います。

今年の秋は、ニューヨークへ行きました。画材はもってゆきましたが、結局、絵は一枚も描きませんでした。どうも私は、マルグリット・ユスナールの本を持って旅行へ行くと、絵を描かないようです。ユスナールの思考は、たとえ翻訳で読んでも完璧に美しいので、私は言葉の世界に留まりたくなるようなのです。今回の作品のなかでは、作品66（入り口正面の四つ切額の一番左）、作品67（奥の黒い額の右下段）、作品25（奥の白額、上段）の三つがニューヨークから帰った後の作品です。

2009年11月21日 「100 x 160の世界」オープニング・パーティー

特別演奏 尺八 山本藍童

曲目 1、「一二三鉢返しの調べ」

この曲は、呼吸を整え雰囲気を作る一二三（ひふみ）の調べと、托鉢の際の返礼曲を組み合わせたものといわれています。琴古流本曲の代表的な曲の一つ。

2、「鹿の遠音」

この曲は三つの部分から成っていて、最初は山の静寂を表し、突然鹿が呼び合います。最後はまた静寂へ戻ります。とても芸術性の高い曲です。

3、「秋田菅垣」

秋の田んぼの風物を表した曲だとか、秋田のあたりに伝わる曲だとか言われています。琴古流本曲のなかでも最もポピュラーな曲です。

演奏者について

荒木流という流派に属する納富寿童の弟子、小野崎玉童の教えを受ける。栃木県三曲協会所属、玉風会を主催。会社勤務のかたわら吹き続けて半世紀、「人生は短し、されど芸術は長し。」という言葉が身にしみる今日このごろだそうです。